

図書館利用者の感想

小林 純 (立教大学経済学部教授)

小林です。経済学部におり、やっているのは、マックス・ヴェーバー (1864-1920, 図1) を中心とするドイツ語圏社会・経済思想史, そしてオットー・ノイラート (1882-1945, 図2) の思想と活動をおいけること, です。きょうは, 図書館にまつわる私の経験のなかから, 皆さんに考えていただきたいことや, 個人的な感想をお話しします。

むかし, 交換留学生としてチュービンゲン大学 (1477年設立) に行く機会がありました。そこで, 大学図書館の所蔵品の展示会がたまたまあり, 近世初頭の, たぶん15-16世紀ころの医学書が出されていました。それがアラビックだったのです。ペルシア語だったのかもしれませんが, そのときは, まぁアラビックだと受け取りました。強烈な印象が残りました。いわば視野が広がったのです。1980年代にある会で, アラビックの医学書を邦訳した五十嵐一氏のお話をうかがうことがあったのですが, 近世では, 西洋の医学研究はまずアラブ世界の学的水準を吸収することに始まった, という筋は, 経験上, 私には極めて説得的であって, 話がはずみました。西洋はこの時点では後進文明地域だったわけです。そしてここで再確認した認識は, 日本の文明史的位置づけ作業に手を延ばし始めていた日本経済史家の川勝平太氏と某学会の懇親会席上での会話の素材として活かされ, 川勝氏の物産複合のアイデアをかなり早い時点で知ることになりました。さらに今年10月, グラーツにりましたが, お世話になった社会学の名誉教授K. アッハム氏がちょうどウズベキスタン旅行をして, ブハラ, サマルカンド, キウイ3都市の写真をファイルで送ってくれました。氏の帰国後の会話でも, この地域が世界の文明の中心だったことが話題となり, 医学・哲学や文芸の歴史的な話に, うろおぼえの知識でつきあいました。

言いたいことは, 図書館は, せっきく所蔵する財産を展示会の形で見てもらおうというのも, 重要な機能として有しているだろう, ということです。見たことの影響は残りますし, それで視野が広がります。材料を仕込むと, 新たな出会いが増えます。川勝氏は現在, 静岡県知事ですが, 五十嵐氏は, 『悪魔の詩』の翻訳者であったゆえか, 殺されてしまいました。新たな出会いは, すべて幸福なままではありませんが, 視野の拡大それ自体は, 単純に望ましいはずです。

二つめはノイラートに関わります。彼はウィーンの住宅地開発運動の組織者だったのですが¹⁾, ウィーンの市議会ではこの運動をどう見ていたか, 知りたくなりました。市議会議事録は, 1919-21年あたりでタイプから印刷物に変わります。図書館は印刷物, 文書館は非印刷物, という分業があるようで, 一箇所連続的に資料を見ることができないのです。ウィーン市=州図書館は市庁舎内 (図3) に, 文書館はガスメーター (Gasometer, 図4) という郊外の施設内に置かれており, 利用者には「困ったこと」です。内容は連続しているのに, 内容に関わらない形式で置き場所が異なるのは, ほんとうに困りものです。文書館と図書館の関係は悩ましい問題を含んでいると思います。



図1 Max Weber



図2 Otto Neurath



図3 ヴィーン市庁舎



図4 ガソメーター

三つめもその関連です。住宅地開発運動を追いかけていると²⁾、書物、雑誌、新聞、運動組織の機関誌・パンフなどを見たくになります。研究者は、興味を持ったもの、あるいは怪しいと感じた事柄については、そのことを実物で確かめたくになります。いくぶんか歴史家としての作業となると、図書館・文書館には収蔵されていないものも見たくになる。特殊な専門資料館にならあるのでしょうか、一般論としていえば、図書館はなにを所蔵するのか、という問題につながると思います。住宅地開発者（Siedlerの私訳）は労働を提供して、出来上がった住宅の居住権を得る、というシステムでした。その労働の種類・時間を書き込むSiedler-Buchというのがあり、この10月、ヴィーン郊外の住宅地で出会った方（図5）に、彼の父親のSiedler-Buch（図6）を見せていただくという機会に恵まれました。彼はこの住宅地に生まれたSiedler第二世代、いま82歳で、彼の名前が通りの名前になっている（図7）方です。まさに「犬も歩けば棒にあたる」でした。史料調査は足でやれ、ということなのでしょう。彼の話の内容は、当時の雑誌などを読んでいた私にはだいたい既知のことではありましたが、図書館などでは見られない現物を見た、というのは貴重でした。



図5 メフラさんと私

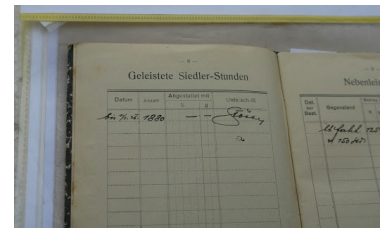


図6 記帳部分

以下、純粹に書物の話です。四つめは、以前、古書店の在庫カタログに2冊気になるものがあり、一方を自分で買い、もう一方を図書館に買ってもらう、ということをやりました。古書を自分で買うか図書館に入れるか。この判断は、私のような一研究者が個人的に大学図書館間分業への評価をすることになると思います。この大学のこの分野ならこの本を入れるべき／入れなくていい、という内容です。これは、NACSIS/WebCatなど無い時代の話ですが、いまでもこうした問題はあらずです。



図7 街路名表示

次は、コピーして本を破壊するという、多くの研究者が経験している（はずの）問題です。稀覯本なら複製版との重本で避けられるでしょう。またウェブ図書館からダウンロードすれば、プリンタのインク代のみでコピー可能です。ノートを取る、という正論で済まない事情を抱える研究者の悩ましい事柄、としておきます。

六つめは、シリーズものの穴うめについてです。立教大学図書館には、戦前のドイツ社会政策学会叢書（Schriften des Vereins für Sozialpolitik）が、かなり入っていましたが、穴があった。しかも検索カードの表記と実物が一致しないものもあった。1980年ころでしたか、私はカードと実物の突き合わせをやって、欠けた部分を、出入りの業者と相談して、実物を所蔵

する図書館のものからのコピー版で埋める，ということをやりました。たしか百万円かかったと記憶します。つい先日も本学図書館で，検索画面上だけですら表示に矛盾があって，穴の存在をうかがわせる，という事態に遭遇しました。利用者としては，コピー製本でいいから穴はふさがっているほうがいいのです。

視点をかえて，大学教員として思うことを最後に。

大学教員は研究者ですから，図書館には，史料の保存や，原典，研究書，学術ジャーナルの充実を望みます。いわば自己の理性を発揮する手段です。同時に教師としては，「教育」手段としての図書館を望むことになります。図書館は，歴史的には啓蒙活動の拠点としての機能を発揮してきたようですが，大学教育は，型のある啓蒙，とでも言えるでしょう。この場合には，知識を与え，理性を自立的に発揮できるよう導く，という作業が私どもの課題になります。学習参考書は自分で買いなさい，とも一概に言えないのは苦しいところです——同僚たちがどんな文献を買わせようとしているかを知る立場にある者の個人的見解を含む，偏った言い方になりますが。その点では，収蔵機能と貸し本屋の両方を望んでいるのでしょう。

啓蒙の手段は文字情報に限りません。ノイラートの言葉に，コトバは人を分ける，図像は人をつなぐ，というのがあります。知識・情報や観念を伝えるのに，図像を用いる考案物として，ISOTYPE (International System of Typographic Picture Education) というものを開発したのがノイラートでした。住宅不足のウィーンで，住宅地開発運動の推進にむけて，土地面積，人口およびその動態，住居数などを，図像統計を用いて啓蒙する必要がありました。そのため住宅・都市建設博物館をつくり，これがのち社会経済博物館 (図8) に発展しました。

その展示用に開発されたのが「ウィーン方式」図像教育です。文字を読めなくとも，簡単な相関関係くらいは図像で表示できます。1934年，ファシズムにウィーンを追われたノイラート・グループはオランダに拠点を移し，ここで新たなISOTYPEを考案しました。ここもナチズムに追われ，最後はイギリスで活動しています。言語というヴェールに覆われたコミュニケーションを図像で透明化する (図9)，という着想は，貨幣というヴェールに覆われた経済関係を実物で透明化する (実物経済計算) という彼の経済論とおなじく，独特な「啓蒙」の理念に基づいていたようです。ちなみに哲学史にユニークな位置を占める「ウィーン学団」というのがありますが，この命名者はその中心人物の一人であったノイラートです。この10月に訪ねたグラーツ大学のマイノック研究所 (Alexius Meinong-Institut) はオーストリア哲学の資料センターにもなっており，今回はウィーン学団の形成に関するノイラートの原稿を少し見てきました (図10)。

図像の利用はピクトグラムにまで進みました。誰でも知っている非常口マークは，日本人の太田幸雄氏の考案によるものですが，太



Gesellschafts- und Wirtschaftsmuseum

図8 社会経済博物館のロゴマーク



図9 ISOTYPE マークとその例



図10 原稿のファイルと所員

田氏はノイラート研究史上、早期の貢献者なのです。駅や空港で、コトバではなく図像が伝達手段であることは、皆さんの経験しているところでしょう。福岡県では、駅に日本語、英語、ハングル、中国語と四つの表示を目にします。ウィーンでお菓子を買うと、包装紙にもものすごく細かい字で6-8カ国語もの成分表示があります。こういう状況を見るにつけ、図像表示の重要性を思い知らされます。

話を戻します。先ほど学生と教員を二分する言い方をしましたが、言いたいことは、その先です。研究者でも、狭い専門領域を一步でると、いわば初心者なのです。専門領域のマターを少々広い土俵の上で位置づけるとなると、私たちも学生と同様の存在として図書館のお世話になる、そう思います。

本日のテーマにはあまり即していませんが、私のささやかな経験からいくつかお話ししてみました。終わります。

【追記】本稿は、2012年12月2日のシンポジウムで話したことの短縮版に一部補筆したものである。当日の雰囲気を残す意味で口語体としたことをご了解いただきたい。

1) 詳しくは、「ウィーンのオットー・ノイラート-1920年代の実践活動-」『ドイツ経済思想史論集 I』小林純，唯学書房，2012，p. 209-238.

2) 詳しくは、「ウィーン住宅建設史のひとつま」『ドイツ経済思想史論集 II』小林純，唯学書房，2012，p. 241-269.